聖　書：マルコの福音書 1：21～39
説教題：さあ、そこでも福音を
日　時：2025 年 5 月 18 日（朝拝）

前回の箇所からイエス様の公の生涯、公生涯が記され始めました。その公生涯の第一声が 15 節に記されていました。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」　近づいたと言われる「神の国」とは、言い換えれば「神の恵みのご支配」のことです。人間は神に造られた最初の時は神の恵みのご支配の中にありましたが、罪を犯して神から離れたため、恵みの支配を失う者となってしまいました。むしろ自らが選んだサタンの支配下にある者となりました。その結果、人間とこの世界には様々な悲しみや苦しみ、そして死が臨むようになりました。しかし旧約の約束に基づいて、ついにメシアであるイエス様が到来し、そのイエス様において神の国が地に臨み始めました。それが具体的にどのように現れ始めたのかが今日の箇所に記されています。

まずイエス様と弟子たちはカペナウムに入りました。カペナウムはガリラヤ湖北岸の西寄りにある町でイエス様がガリラヤ宣教の拠点とされた町です。そこにある会堂にイエス様は安息日に入って教えられました。当時 13 歳以上のユダヤ人男子 10 人以上が集まれば会堂を持つことができ、その会堂司が会堂での礼拝に責任を持っていました。その会堂司の管理の下、ゲストスピーカーが説教することも良く行われていたことが使徒の働きからも分かります。ここでもそのようにイエス様が（おそらく聖書朗読がなされた後）、お話をされました。その教えを聞いて人々は驚いたのです。「イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである」とあります。律法学者は、その名の通り、律法を研究する学者たちで、彼らは先達の学者やラビの解釈を引用し、それを後ろ盾として話をするのが一般的でした。つまり他人の権威に寄りかかった話し方でした。しかしイエス様はご自身が権威ある者として話をされました。それはイエス様が神の子であられるがゆえの当然のことでした。聞いていた人々は圧倒され、これまでの人と違うことを一瞬にして感じ取ります。この人は別格である。この人自身に権威があると。

そればかりか汚れた霊につかれた人から、その霊を追い出すみわざもイエス様は行われました。何と神聖な礼拝場所に汚れた霊につかれた人もいたというのです。その

霊が取りついていた人はイエス様を見て叫びます。「ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」　悪霊たちの方がイエス様の正体に気づくのが早かったことがこの後も記されます。この悪霊は「放っておいてくれ！」と言います。「滅ぼしに来たのですか」という問いは、いずれ自分たちがそのようにされる運命にあることを彼らが知っている発言のように思われます。「私はあなたがどなたなのか知っています」というのは、当時相手の名を正確に言い当てることによって、相手の上に力を持てるという考えがあったことと関係するようです。そんな汚れた霊に対してイエス様は「黙れ。この人から出て行け」と命じました。すると汚れた霊はその人を引きつけさせ、大声をあげて、その人から出て行きました。人々はこれを見て驚きます。「これは何だ。権威ある新しい教えだ。この方が汚れた霊にお命じになると、彼らは従うのだ。」　当時、悪霊払いができるとする人たちもいたようですが、その人たちは秘伝の呪文とか魔術的な道具を使ったようです。しかしイエス様はたった一言を発しただけでした。その圧倒的な権威がここに示されました。

　さて、ある人たちはこのような聖書の記事を読んで戸惑いを覚えるかもしれません。悪霊払いなんていつの時代の話か？今日このような記事を読むことに何の意味があるのか？と。しかし聖書はこうして重要なことを私たちに語っています。イエス様は公の生涯に踏み出す前、ヨハネから洗礼を受けて、まずサタンと戦うため荒野に行きました。そして公生涯に踏み出し、数名の弟子たちを得た後、最初に書かれているのがこの悪の霊に関することです。ここにイエス様の戦いの性質が示されています。イエス様は地上的帝国――この時はローマ帝国でしたが――そういう地上的国家と戦うために来たのではありませんでした。あるいは人間的な権威、ユダヤの宗教的指導者たちと対決するために来たのでもありませんでした。イエス様がまず戦われたのはサタンや悪の霊に対してでした。これは宇宙的な戦いと言えます。神とサタンの戦い、あるいは神の国とサタンの国との戦い。実はこれがすべての問題の背後にあることであるということです。反対から言えば私たちが見ているのは浅はかなレベルに過ぎないかもしれないということです。私たちは目で見ていることがすべてだと思いやすいのですが、目で見ているレベルよりももっと深い霊的な戦い、霊的な現実があるということを聖書は指し示しています。それとの戦いがまずこうして示されているのです。そしてそこにおいてイエス様は圧倒的権威を持つ方であるということが言われているのです。

次にイエス様は会堂を出てシモンとアンデレの家に行きました。そこではシモンすなわちペテロの姑が熱を出して横になっていました。人々が彼女のことをイエス様に告げるとイエス様はそばに近寄り、手を取って起こされました。すると熱が引いたとあります。つまり悪霊の上ばかりでなく、病気の上にも権威を持つイエス様であることが示されたわけです。病気は人間にとって本来的なものではありませんでした。これも罪の結果、この世界に入って来たものです。神の恵みの支配を失った結果、入って来たものです。それに対してイエス様は神の恵みの支配をもたらす方です。イエス様はこうして神が創造において意図された本来の人間の状態への回復を導いておられたのです。ここに神の国が到来している証しが示されたのです。シモンの姑は人々をもてなします。さっきまで熱で横になっていたのに驚くべき回復が与えられたのです。

32 節以降にはこの日の夕方のことが記されます。日が沈んで安息日が終わったからでしょう。人々は病人や悪霊につかれた人をみなイエス様のもとに連れて来ました。つまり今日見て来たことはすべてある安息日一日の内に起こった出来事であるということです。イエス様は様々な病気にかかっている多くの人を癒やし、また多くの悪霊を追い出しました。そして悪霊どもがものを言うのをお許しになりませんでした。先の汚れた霊と同様、ここでも悪霊たちは人間以上にイエス様のことを知っていますが、その彼らから人々が教えられることをイエス様は良しとされませんでした。人々が自分の目でイエス様を見、イエス様を理解し、自分の言葉で告白するようになることを求められました。

さて 35 節以降に、イエス様は翌朝早く、まだ暗い内から祈っておられたことが書かれています。福音書にはこのようにイエス様が一人寂しい場所に退いて祈っておられたことが記されています。特にルカの福音書に多く書かれています。マルコの福音書ではここと 6 章 46 節、14 章 32 節以降の 3 箇所です。3 回しかないからマルコは祈りを軽んじているということではありません。この 3 回はいずれも重大な意味を持つ時でした。6 章 46 節は五千人の給食のみわざを行った後です。また 14 章 32 節以降は十字架前夜のいわゆるゲッセマネの祈りです。そして今日の箇所は公生涯が始まって間もなくの重大な時だったと言えます。それはこの後を読むとさらに良く分かります。弟子たちはイエス様を捜して見つけ、「皆があなたを捜しています」と声をかけます。

イエス様は前日人々の間で大人気を博しました。多くの人々がイエス様のもとにやって来て町中がイエス様の話で持ち切りでした。幸先の良いスタートです。その勝利の状態に戻るように！との呼びかけでした。私たちだったらどうするでしょうか。そうかそうかと言って急いで人々が待つ場所へ戻るでしょうか。

しかしイエス様はこう答えられました。38 節「イエスは彼らに言われた。『さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。』」　ここに弟子たちや群衆の期待や願いとは異なる道を進まれたイエス様の姿が描かれています。そしてここにこの日の朝早くにイエス様が持たれた父なる神との祈りの交わりの意義が現れていると言えます。先に述べたように、前日のイエス様の活動は人間的な目で見るなら大成功でした。多くの人々がイエス様のもとに集まり、この日も多くの人々にイエス様は求められています。そういう状況でイエス様は祈られました。どうすることが父の御心にかなうことなのか。その結果として、イエス様は「さあ、近くにある別の町や村へ行こう」と言われたのです。「そこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから」と。イエス様はこうして神との交わりを通してご自分が取り組むべき課題の優先順位を確かめられたのです。なすべきことは多くあります。良いと思われることはたくさんあります。しかし一つの体しかないイエス様がその全部をすることはできません。確かに病気を治すことや悪霊を追い出すことも良いわざです。それは神の国の祝福の現れです。しかし現在、人々はイエス様をただ奇跡を行う人として見て集まって来ているだけです。イエス様の公生涯の第一声は「悔い改めなさい」でしたが、今イエス様のもとに来ている人々に「悔い改め」が起こっているわけでありません。神との真の関係回復が生じているわけではありません。そこでイエス様はご自身の第一の使命である「福音を広く伝えること」を優先して、そこに進まれたのです。その働きを第一にする中でもちろん癒やしや悪霊追い出しも行うでしょう。しかし優先順位を間違えないように！ご自身に与えられた第一の使命に邁進するように！と導かれたのです。

こうして最後の 39 節に「イエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた」と記されます。イエス様はそこにエネルギーを投入して活動を展開されました。それはイエス様の見えないところでの祈りを通して導かれて来たことだったとこの箇所は記しています。この後も癒やしの記事が二つ続きます。この前後の癒やしの記事に挟まれるようにして、祈りに関するこの記事がある

ということは、イエス様のすべての活動の中心にこの祈りがあった、父なる神との交わりがあったということをこの箇所は語っていると考えられます。

以上を振り返って二つのことを短く述べてまとめとしたいと思います。一つは今日の箇所には神の国を宣べ伝えているイエス様の姿が記されましたが、そこでは特に霊的な戦いが強調されていたということです。先にも触れた通り、今日ある人たちはこのような記事を読んで軽蔑するかもしれません。科学的ではない、時代遅れの話であると。しかし神の言葉である聖書はこうして私たちの目に見える世界の背後には目に見えない霊的世界の戦いがあることを語っています。そして実はそれが重大なことなのです。それは言い換えれば私は神の恵みの支配の下にあるのか、それともそうでないのかという問いとも関わります。本来私たちの上にあった神の恵みの支配は私たちの罪によって失われ、私たちの生活には色々な災いや苦しみ、悲しみが臨んでいます。そんな私たちを神の恵みの支配に生かすためにイエス様は来られました。それはイエス様によって私たちが神との正しい関係に立たせていただくことを通して私たちに実現します。イエス様はそのために福音を伝える働きにご自分をささげて歩まれたのです。私たちは私たちの目が見ているところよりももっと深いところに真の問題があることを覚えて、神の恵みの支配をもたらすために来られたイエス様を見つめ、この方がくださる神の国の祝福に生かされる者でありたいと思います。悪の霊の力から解放され、また心も体も神が意図された人間本来の幸いな状態へと回復される恵みの中を生かされる者たちとされて行きたいと願います。

もう一つは祈りの重要性についてです。イエス様でさえ神との交わりを通してご自分の優先順位を確かめ、強められて、歩まれました。とするなら私たちもなおのこと、この祈りの時を必要としている者たちではないでしょうか。イエス様の前には二つの誘惑がありました。一つは人々からの多くの賞賛、歓迎、そのような勝利の状態にとどまるように！という誘惑です。そこに浸っている方が良いという誘惑です。しかしそれは十字架に向かって進むというイエス様の使命と反対の道を行くことを意味します。このような形でもサタンの誘惑がここにあったと言えます。イエス様は祈りを通してこれを退けられました。もう一つは人々からの多くの要求、求めに応じたいとする心です。それ自体良いことですが、それらに忙殺されてもっと優先して取り組むべき最善をおろそかにしてしまいかねません。イエス様はそんな中で祈り、父なる神との交わりを通してご自分が選び取るべき道を改めて確信されました。その時、イエ

ス様はそれ以外の一切から自由であることができたのです。ご自分は神から与えられた第一の使命に集中して取り組めば良い。またそのようにして神の御心を確信して進むことによってイエス様は大きな力と励ましを受けたことでしょう。神の御心の道を進むなら、神が助け導いてくださる。神が私の行く道を支え、守ってくださると。

38 節の「さあ、行こう」というイエス様の言葉には朝の祈りの時を経た結果としてのすがすがしさが感じられるのではないでしょうか。新しい風を帆にはらんだ船のように、イエス様は軽やかに、また力に満ちて出発しています。私たちも人々からの期待や要求、また自分で考えたあれやこれやの沢山のスケジュールに悩まされ、翻弄されるのではなく、まず神に祈り、神と交わり、その中で自分が今日取り組むべき課題は何か、最も自分をささげるべき働きは何かを教えていただく者でありたいと思います。そして神との交わりを喜び、それに強められて、「さあ、行こう！」と日ごとに新しい力を受けて出発し、いつまでもなくならない永遠に価値ある働き、神の国のための歩みへと導かれて行きたいと思います。